長崎市景観専門監レポート

2013－2022

地域の価値を高める
公共事業を目指して

長崎市景観専門監
髙尾忠志編著

長崎市

INDEX

あいさつ
長崎市長・田上富久 …… 2
長崎市景観専門監・髙尾忠志 …… 3

景観専門監設置の背景
「100年後の長崎をつくる」 …… 4

景観専門監の仕組み
現場で職員に”伴走する” …… 5
大きい事業から小さい事業まで …… 6
人材こそ地域の未来 …… 7

景観専門監の役割
景観専門監は”問う” …… 8
景観専門監は”つなげる” …… 9

景観専門監による人材育成
景観専門監協議で印象に残っていること、学んだこと …… 10 ― 13

主な監修プロジェクト
平和公園の一連の改修 …… 14 ― 15
ししとき川通り …… 16 ― 17
鍋冠山公園展望台 …… 18 ― 19
深堀ふれあい広場 …… 20 ― 21
出島表門橋・出島表門橋公園 …… 22 ― 23
遠藤周作文学館思索空間アンシャンテ …… 24 ― 25
遠藤周作文学館コスモス花壇 …… 26
平和祈念式典生花パネル …… 27
稲佐山電波塔ライトアップ …… 28 ― 29
長崎まちなか夜間景観 …… 30 ― 31
稲佐山スロープカー …… 32 ― 33
長崎のもざき恐竜博物館・恐竜パーク …… 34 ― 35
あぐりドーム …… 36 ― 37
魚の町公園 …… 38 ― 39
新庁舎 …… 40 ― 41
長崎駅周辺整備事業 …… 42 ― 45

監修プロジェクト一覧 …… 46 ― 47

監修プロジェクトの受賞歴 …… 48

主な掲載メディア …… 49

全国でまちづくりに取り組まれる皆様へ …… 50

長崎市長　田上富久

まちづくりについて、こんな寓話を話すことがあります。

まちに公園をつくることになりました。最初から見栄えの良い公園をつくろうと、大きな木ばかりを運んできて植えました。すると、その年に台風が来て、植えた木はみんな倒れてしまいました。

今度は大きな木は何本かにして、苗木をたくさん植えることにしました。苗木は土の中に根を伸ばした分だけ、空に向かって伸びていきました。台風が来ても、根がしっかりと幹を支えてくれたのでビクともしません。10年もたつと、立派な木になりました。

「まちづくりには10年単位の時間がかかる」とよく言います。私もよく使うフレーズです。それは「10年かかってしまう」という側面ももちろんありますが、それだけではなく、「10年かけてもよい」や「10年かけた方がよい」という意味を含んでいます。継続の大切さ、という意味もあります。いずれにしても、まちづくりは長い目で観ることが大切だということです。

＊　＊　＊

長崎市が景観専門監というポストを設けてからちょうど10年がたちました。

私が10年前に髙尾忠志九州大学特任准教授にお願いしたミッションは「市の公共事業のデザインのレベルを上げてほしい」「その過程を通じて職員を育成してほしい」の2つでした。

今回で2冊目になる長崎市景観専門監レポートは、その2つのミッションに関する5年ごとの報告書という意味を持っています。報告の内容については私がここで述べるよりも、レポートを読んでいただくのが良いでしょう。

読んでいただくと、2つのミッションがいかに具体的で人間的な作業か、が伝わってきます。言い換えれば、2つのミッションがいかに具現化力と人間力が必要なミッションかということでもあります。一つ一つの事業がまるで一つの物語のようでもあります。それだけ真剣で濃密だからこそ職員の成長につながるのだと思います。そして、そこで職員が得たものは根となって、一人ひとりの成長を支えてくれる財産になることでしょう。

10年という時間は、単に事業の数を増やしてくれただけではありません。ちょうど建物が街並みになり、点が線になるように、一つ一つの取り組みが10年の時を経て、「蓄積」や「集積」という形になり始めています。それはまさに10年という時間をかけたからこそ生まれた新しい価値です。

一つ一つの景観づくりが長崎のまちに新たな価値を生んだだけでなく、それが蓄積し、集積することでもう一回り大きな価値を生んできた。長崎市景観専門監の10年はそのための10年でもありました。この時間のかかるミッションに常に真摯に向き合い、多くの価値を長崎に生んでくれた髙尾忠志さんには心から感謝しています。

＊　＊　＊

このレポートにはもう一つ、別の側面があります。事例報告はどれも長崎市を現場とするものですが、そこにあるエッセンスは決して長崎市だけに通じるものではありません。どのまちにおいても景観形成のヒントになるものが数多く含まれているはずです。私たちが他都市の景観づくりに学ばせていただいているように、このレポートが全国で都市デザインや景観形成に取り組まれている皆さんのお役に立つことができれば、これほどうれしいことはありません。

景観専門監という仕組みは、長崎市が日本初であり、現時点で唯一です。まちづくり分野における素晴らしい発明だと思います。市役所に外部専門家を職員として招聘し、部局関係なく全庁的に監修させる。景観専門監からの「問い」によってもたらされる職員の「気づき」が、道路や公園等の公共施設として具体のカタチになるにつれて、職員の成功体験がモチベーションを育み、人材育成につながっていく。時代のニーズが大きく変化し、まちをアップデートする必要がある時代に、走りながら職員の資質を高めていく景観専門監の仕組みは極めて有意義だと感じています。

2013年4月の景観専門監就任以来、10年間で200を超える事業を監修し、おそらく3000件以上の協議を積み重ねてきました。多くの協議を積み重ねてきた職員が提示する検討案は当初から比べると格段にレベルアップしており、かつて2時間かかった協議がいまでは30分あれば十分になりました。もちろん職員の数は少なくありませんし、市役所には毎年新しい人材が入ってきますのでこの取り組みに終わりはありませんが、これまでの10年間で成長した職員の存在はこれからの長崎市のまちづくりにおいて大きな力になると思います。

職員とともに取り組んできた成果は、長崎駅、出島メッセ長崎、新庁舎、出島表門橋、稲佐山スロープカー、稲佐山電波塔ライトアップ、まちなか夜間景観、鍋冠山展望台、恐竜博物館、あぐりドーム、遠藤周作文学館アンシャンテ等、具体的に風景として実感できるレベルまで積み重なってきました。「100年に一度」というキーフレーズとともにハードウェアのアップデートが実現したことで、次のステージのまちづくりが始まるんだ！という共通認識が市民にも職員にも生まれてきています。

今後、長崎市のまちづくりは、まちを支えるインフラ（ハードウェア）のアップデートをさらに継続しながら、それを機能させるための仕組み（OS）と、そこで展開するアクティビティ（ソフトウェア）についても、最新バージョンにアップデートする時期を迎えました。固定観念や過去の成功体験を捨てて、時代のニーズに応えながら、実利的に、持続的な仕組みを再構築するためのチャレンジが求められます。そうしたチャレンジの連鎖によって、「交流の産業化」と呼ぶ、新しい基幹産業の創出が実現すると考えています。

この10年間、景観専門監はたくさんの方に支えていただき、本書でご紹介するような成果をあげることができました。現場でご一緒いただいた市民の皆様、設計会社や施工会社の皆様、そして、田上市長をはじめとする職員の皆様に感謝申し上げます。『景観専門監レポート vol.1』（長崎市のホームページにPDFファイルが掲載されています）にも同様のことを書きましたが、「景観専門監」は皆様とともにつくり上げてきた「プロジェクト」です。一度しかない人生において「長崎市景観専門監」として働ける機会をいただいた幸運に心から感謝します。

長崎市景観専門監
髙尾忠志

地域計画家。博士（工学）。技術士（建設部門）。専門は景観、公共デザイン。2013年度から長崎市景観専門監に就任。一般社団法人地域力創造デザインセンター代表理事。九州大学持続可能な社会のための決断科学センター特任准教授。

「100年後の長崎をつくる」

長崎市の地域戦略：交流の産業化

長崎市の人口社会減少数は全国の自治体でもワーストクラスであり、大企業に依存した地域経済からの転換をはかり、新たな基幹産業を確立していくことが重要な課題となっています。そのための地域戦略が「交流の産業化」です。

歴史を振りかえれば、長崎は交流によって生まれ、発展した都市であることがわかります。長崎市は、そうしたまちの「これまで」の延長線上に「これから」の持続的な未来を描こうとしています。長崎のまちを舞台とした交流を活発化させ、その交流の恩恵が中小の多様なビジネスやソーシャルアクティビティに波及し、地域の経済と社会を支える、という地域戦略は長崎のまちならではのオリジナリティと確かさを持つとともに、現代の地域づくりの潮流を読んだビジョンと言えるでしょう。

この「交流の産業化」という地域戦略を実現していくためには、様々な分野、立場における創意工夫やチャレンジが必要となってきますが、その基盤となるのが、長崎に住み、長崎を訪れるモチベーションの源となる**「長崎のまちに来ないと享受できない価値」＝「まちの魅力」**です。特にまちを具体的に改変する公共事業において、景観や歴史等を活かした**「場所に属した価値」**を生み出し、地域の魅力を高める整備を積み重ねていくことが地域の未来にとって重要です。

地域の価値を高めるものづくりを

長崎市では、新幹線開業にともなう長崎駅周辺整備事業、出島メッセ長崎の開業、出島表門橋架橋、新庁舎建設等、様々な公共事業が進行してきました。「100年に一度」と言われる長崎のまちの基盤を大きく更新するこの時期に何を残すかが100年後の長崎のまちの運命を変えると言っても過言ではありません。

長崎市が進める公共事業の一つ一つにおいて、長崎のまちの価値を高めるようなものづくりを実現していくためにはどうすればよいでしょうか?古典的な学説になりますが、「マズローの欲求段階説」を手がかりに考えてみます。マズローによれば人間の欲求は5段階に分類されます。まず、「生理的欲求」と「安全欲求」という「低次の欲求」が満たされる必要があります。戦後の焼け野原からの復興、高度経済成長においてはこれらの欲求を満たすことで「豊かさ」を実感することができました。しかし、それらが安定的に満たされるようになると、人間は「帰属欲求」「承認欲求」「自己実現欲求」と言った「高次の欲求」を求めるようになります。**利便性や安全性にとどまらず、他者との交流や社会との関係性の中に精神的な充足が求められる時代**になりました。

戦後、高度経済成長期に構築された、これまでの公共事業のやり方をそのまま踏襲するだけではこうした「高次の欲求」には応えられません。長崎市の職員は、予算、時間、基準等の様々な条件を踏まえながらも、ひとつひとつの公共事業を時代の要請にあわせて丁寧に見直していく必要があります。そこで職員を現場で指導する「家庭教師」として、平成25年4月に設置されたのが「長崎市景観専門監」なのです。

長崎のまちは「100年に1度」の更新時期を迎えている

現場で職員に”伴走する”

景観専門監の2つのミッション

景観専門監に与えられたミッションは2つです。ひとつは**「長崎市が行う公共事業のデザインの指導と管理」**、もうひとつは**「長崎市職員の育成」**です。

自治体が運用する一般的な景観アドバイザー制度や有識者会議等では前者のみがその役割となりますが、この2つのミッションに一体的に取り組む点が景観専門監という仕組みの重要な特長です。市職員一人一人が、長崎市の未来をつくっていく主要な人材であるからです。景観専門監は、地域の未来に貢献する「良い公共空間」だけでなく「良い人材」も残していくことをミッションとして与えられています。

景観専門監の位置付け

景観専門監は、長崎市という行政組織の中（インハウス）に設置された、景観デザインという専門的な観点からの監修者（スーパーバイザー）です。今後、我が国でも増加していくであろう**「インハウス・スーパーバイザー」**という職能のモデル的存在と言えるでしょう。

受け入れ窓口は「まちづくり部景観推進室（平成30年3月までは「まちづくり推進室」）」が担っており、景観推進室にデスクも設置されていますが、景観専門監自身はいずれの部局にも属さずに、あらゆる部局の事業が監修対象となります。

階級的には「次長級」に設定されています。部長級以上が中心となる政策判断に直接参加することはありませんが、現場でプロジェクトを進める課長以下の職員は指導対象となります。長崎市が進める政策を現場レベルでいかにクオリティ高く実現していくのか、そのための技術的な検討を指導する位置に景観専門監は置かれています。

1日の動き

景観専門監は基本的に職員とともに「現場に」います。典型的な1日の動きを下記に示していますが、平均して1日4～5件の協議に参加し、職員と一緒に事業の重要な判断を行います。

AM11:00 ～

関係課・設計者との協議

PM1:00 ～

現場協議

PM2:00 ～

検討委員会

PM4:00 ～

施工現場協議

PM5:00 ～

現場での関係課・設計者との協議

PM7:00 ～

市民ワークショップ

大きい事業から小さい事業まで

景観専門監は、これまでの10年間で200を超える事業を監修してきました（p.46-47参照）（未完了の事業も含む）。駅周辺整備や出島表門橋架橋等の大規模事業はもちろん、公園や街路の改修等の中規模事業、水道管のメンテナンス（塗装）等の小規模事業まで規模の大小に関わらず監修する点が特徴的です。**どんなに小さな事業でも創意工夫を積み重ねていくことが地域全体の価値を高めていくことにつながる**からです。

監修の対象となる事業は、①「長崎市景観計画」の景観形成重点地区内の事業、②一般地区内の規模の大きな事業、③その他市長が監修するよう判断した事業、④担当課から監修の申し入れがあった事業等となります。

景観に関わるものであれば市の**あらゆる部局のあらゆる事業に参加**します。実際にこれまでの10年間でまちづくり部、土木部といった建設系の部局以外にも文化観光部、企画財政部、市民生活部、水産農林部、総務部、理財部、環境部、福祉部、原爆被爆対策部、教育委員会等の幅広い部局の事業を監修してきました。

景観専門監の対象事業

大規模事業のデザインマネジメント

例：長崎駅周辺整備事業、出島表門橋・出島表門橋公園新庁舎、出島メッセ長崎等

プロジェクトで何を実現するのか（目標）、何を重要視するのか（優先順位）、何を計画や設計の前提とするのか（前提条件）を職員とともに整理しながら、どのような体制とプロセスで検討を進めるのか（体制構築）、計画や設計を行ってもらう腕のよいチームをどう獲得するのか（設計者選定プロセスの企画）等にも取り組み、体制が構築された後は、検討ワーキング座長や検討委員会委員、市民ワークショップの全体ファシリテーション、市民シンポジウムのコーディネート等の役を担い、プロジェクト全体のマネジメントを行ってきました。関係機関とのデザイン調整や施工現場におけるデザイン監理も行います。良い施設を実現するための「デザインマネジメント」において主要な役割を担っています。

大規模事業の例：長崎駅周辺整備事業

中規模事業のデザインとプロセスの監修

例：まちなか夜間景観、あぐりドーム、恐竜博物館・恐竜パーク等

担当課の職員が示す図面や資料、施工現場に対して指導、助言を行いながら、デザインの監修を行っています。協議は会議室だけでなく、現場でも行うことを原則としています。また、夜景やプロダクトデザイン、子育て等の外部専門家と職員との協議を支えるとともに、岩原川プロムナードや深堀ふれあい広場等では市民ワークショップによる検討を行うように指導し、ワークショップのファシリテーションも行ってきました。

中規模事業の例：あぐりドーム

小規模事業のデザインワンポイントアドバイス

例：水道管塗装、サイン設置、wifi設置等

担当課の職員が示す図面や資料、施工現場に対して指導、助言を行いながら、デザインの指導を行っています。塗装色の選定や設置位置等の検討を行ってきました。協議は原則として現場で行い、ほとんどの場合1～2回で終わります。

小規模事業の例：天主公園横水道管塗装

人材こそ地域の未来

景観専門監は、各事業の担当者との現場協議によって職員の育成を進めるOJT（On the Job Training）とともに、下記のような職員研修も積み重ねてきました。

まるかじり講座

2013～2017年度には、職員を対象とした研修講座「まるかじり講座」に登壇して、一年間の活動報告をしてきました。参加職員は毎年約100名にのぼります。活動報告の後、市長と対談したり、内容も趣向を凝らしてきました。特に3、5年目には、それまでプロジェクトを一緒に進める中で成長著しかった土木、建築、農林、文化財等の幅広い分野の若手職員7名に3分間スピーチをしてもらい、パネルディスカッションを行いました。こうした企画は、若手を中心とした職員全体に良い刺激を与え、若手職員から専門監協議の申し入れを受けることもありました。

まるかじり講座

景観専門監プロジェクトさるくツアー

会議室での講演だけでは、特に事務職員には内容がわかりづらいところもあったため、2017年度には景観専門監の監修プロジェクトの現場を歩いてまわりながら、担当職員が解説をする「さるくツアー」を5回開催しました。現場をみることによって、技術的な検討内容もわかりやすくなります。また、ツアー後の懇親会は、これまで出会うことがなかった職員同士の交流の場にもなり、職員同士のつながりを生み出す効果もありました。

景観専門監プロジェクトさるくツアー

職員研修所「職員研修プログラム」での講師

職員研修所が企画、実施している1～10年目の職員研修プログラムにおいて、長崎市の景観まちづくりについて講義を行なっています。長崎市が進めているまちづくり全体の流れを理解していただくとともに、先輩職員たちがそれぞれの仕事で創意工夫を行い、達成感ややり甲斐を感じていることを知ってもらうことで、自分たちの仕事に対するモチベーションを高めてもらうことを目標としています。社会やまちはまだまだ良くなれる、という希望を職員自身が持っていることが大事だと思っています。

職員研修プログラム

職員研修所「若手職員パワーアップセミナー」での講師

職員研修所が企画、実施している「若手職員パワーアップセミナー」で、講義、現場見学、ワークショップの講師を務めています。30歳前後の若手職員から希望者が20名程度集まって開催しています。例えば、「長崎駅前の新しい広場ができたら」「出島表門橋公園を活用してどんなことがしたいか」をグループワークで考え、そのために市役所ができることは何かを考えるプログラムにより政策立案能力（ハード整備やソフト活動だけでなく、それらを実現するための仕組みの提案能力）を高めることを目標としています。これからの時代のニーズに応える職員に必要な能力の育成を目指しています。

若手職員パワーアップセミナー

景観専門監は“問う”

Step 1 諦めていないか：工期と予算の範囲内で考える

協議は担当職員の説明から始まります。説明が終わったら、私から検討の方向性を提示するために必要な情報を質問します。多くの場合最初に工期と予算を確認します。さらに、住民の要望や積極性、市長等の上層部や関係者の意向、担当者自身の意見、施工の制約となりそうな現地状況等を順々に確認していきます。**職員の課題認識を共有して、その課題にともに向き合うところが協議のスタートライン**となります。特に工期と予算は余程のことがない限り与えられた範囲内で検討することを景観専門監協議の原則としています。

その上で、担当職員の案について、なぜそのような選択をしたのかを質問します。するとそこに様々な固定観念や諦め、技術的な未熟さを発見することになります。「景観に配慮するためにダークブラウンにしました」「この予算ならこの程度の製品になります」と言った説明をよく耳にします。**「見直せない条件」と「見直せる条件」**が見えてきます。事業の工期と予算と法令基準を崩さずに、より良いものを実現していくためには、**担当者自身や関係者が持っている「思い込み」「諦め」を技術的な観点から見直す**ことが重要です。景観専門監はそこを問う役割を担っています。

Step 2 何を見ているのか：「現場に立って全体を見る」

次に担当職員とともに現場を訪れます。**景観専門監協議では現場での協議が原則**です。なぜなら「景観」は「現場に立ってみえてくる全体」であり、「全体」における対象のあり方を考えるのが景観デザインだからです。また、会議室では、担当者と専門監は相対して話をしますが、現場にでれば、横に並んで同じもの、同じ方向をみながら話をすることになります。議論によってお互いの意識のズレを埋めていくために、このシュチュエーションはとても効果的だと考えています。

さて、現場に立ってもう一度担当者に質問をします。例えば、なぜダークブラウンにしたのか。そうすると担当者は現場に判断の根拠を探し始めます。このプロセスによって初めて景観協議が起動します。

Step 3 手で考えているか：景観専門監は線も絵も描かない

現場には様々な手がかりがありますので、どのような選択が適切なのか判断に迷う場合もあります。その時に拠り所になるのは、どれくらいの案を具体的に検討したかというスタディの「量」です。**職員自身が頭ではなく手で考えているか**が問われます。景観専門監は線を引きませんし、絵も描きません。50点の案が出てくれば問いかけることで60点に、60点を70点に、時間の許す限りスタディを繰り返してもらいます。

Final 可能性を信じているか：職員は事業のプロデューサーである

職員は担当する事業の「プロデューサー」です。プロジェクトで何を実現したいのかを考え、それを実現するための方法を考える。一人でできないことは仲間を募り、思いを共有して実現する。**職員自身が、事業の可能性を信じ、探求しているか**が問われます。前向きに検討し、創意工夫を込めていけば内容は必ず良くなります。そうして納得のいく仕事ができた時、その成功体験によって職員自身もやりがいを感じ、職員として一回り成長します。それ自体が景観専門監のミッションであり、喜びでもあります。

景観専門監は“つなげる”

1 円卓を囲む

縦割り組織による役割分担は、業務を効率的に進めるために効果的な体制であり、その効用はあらためて語るまでもありません。一方で、複雑化する地域の課題を解決し、地域の価値を高める公共事業を実現するためには、地域の過去（調査・研究）と未来（計画・設計）の連続性の確保、ソフト（利活用）とハード（整備）の一体的な検討、空間的な一体性を生み出すトータルデザイン等、**縦割り組織を超えた横断的な検討が必要**となります。

景観専門監は、事業の関係課が参加し、円卓を囲んで協議する場を設け、その協議のディレクションと調整のコーディネートを行います。景観専門監は行政組織に横断的なチームをうみだす**「円卓効果」**を持っています。

2 「政治」と「行政」と「現場」を行き来する

地方自治体の公共事業には、市長や議会等による議論（政治）、法令基準等に基づく担当部局による協議（行政）、市民等との検討（現場）の3つのフェーズが存在しています。これらはそれぞれ異なる観点、判断基準を持っているため、必ずしも一致した見解とはならず、それらの意見を踏まえた検討や調整が求められます。

景観専門監は、一年目の職員から係長、課長、部長、市長まで、市役所の様々な立場の職員と話をする立場にあるため、**政治的・行政的判断を踏まえた協議を現場で実現する**ために役に立つことができます。景観専門監は行政組織の横割りをつなげる**「縦串効果」**を持っています。

3 事業の時間的な一貫性を保つ

地方自治体の職員は人事異動が宿命です。また、事業の検討フェーズが進むに従って、担当部局が移ることもあります。また、予算は単年度執行が原則ですので、計画や設計、施工を担当する建設コンサルタントや建築事務所等の技術者も業務ごとにメンバーが変更することが通例です。

景観専門監は、プロジェクト単位で監修者として参加しているため、**一度監修し始めた事業は完了まで関わり続けます**。それによって事業に時間的な一貫性を保つ**「時間串効果」**を持っています。景観専門監は、そのプロジェクトに関わった人々の思いを引き受けて、次のメンバーにバトンを渡していく立場にいるのです。

4 市民と専門家と行政との“触媒”になる

事業の質や効果を高めていくためには、市民や専門家と自治体職員の協働が効果的です。一方で、職員は行政の都合による意思決定を重要視するあまり、異なる立場や観点を持つ人々との対話や協働が苦手な場合が少なくありません。もちろん行政が守るべき法令や手続き等を破ることはできませんが、その上で知恵をしぼり、対話を重ねて、市民や専門家の力を活用しながら、より良い解を見つけていく柔軟な姿勢や発想が求められます。

景観専門監は、その専門性とこれまで有識者会議や地域での市民との会合をコーディネートしてきた経験を活かして、こうした職員による協働のプロセスを円滑に、効果的に進めていくための裏方としての役割も担ってきました。景観専門監は、市民や専門家と行政との協働を実現する**「触媒効果」**を持っています。

景観専門監協議で印象に残っていること、学んだこと

大久保貴史（地域整備1課）

私にとって初めての景観協議は鍋冠山公園展望台の基本設計でした。私は当時、過去の資料などを基にバリアフリー化に向けた整備内容について協議しましたが、景観専門監からは「訪れる人はバリアフリーを求めて来るのではない。訪れる人にこの公園の魅力がわかりやすく伝わる方法について考えてみよう。」と言われました。それからは利用者の立場になって整備目的を考え、どのように整備すると利用者がより楽しんでもらえるのかということを意識するようになりました。その後も平和公園をはじめ様々な公園で景観協議しましたが、景観専門監にはよく現場にも来ていただきました。実際に訪れる人と同じ環境で物事を考えることで利用者に寄り添った公園づくりにつながったと実感しています。

松藤恭平（地域整備2課）

学生時代を含め、ずっと景観には縁がなかったので、髙尾先生と関わるまでは、「色はダークブラウンにしとけばいいだろう」くらいの意識しか持っていませんでしたが、先生と協議させていただくなかで、「街における位置づけ・役割」、「その場所が持つ歴史」、「周囲の町並み」、「人の流れ」など様々な要素を組み合わせ「場の質」を上げることが重要なのだと学びました。協議の際には「ダークブラウン万能説はただの都市伝説」や「スタバの居心地がいい理由は、いろんな椅子が用意されていて、利用者が居場所を選べるから」など、楽しくてわかりやすい講義を聞けたことが印象に残っています。

平山広孝（景観推進室）

入庁3年目、長崎駅前にある岩原川の周辺環境整備を担当しました。デザイン学科の出身だったこともあり、自分でCGを駆使して整備計画案を作成したところ、景観専門監からワークショップにより市民と一緒に整備案を作成するよう指示がありました。1年間に5回のワークショップを行い、地域の魅力と課題、まちづくりの将来像、詳細な整備計画案について市民と意見を交わしました。その結果、当初作成したCGイメージに近い整備となりましたが、市民と整備された環境の関わりを見るに、官民で力を合わせてより良い公共空間を整備する「プロセスのデザイン」がいかに重要か知ることができました。

前川正和（駅周辺整備室）

髙尾景観専門監との出会いは、いなさ口（西口）の広場整備が真っただ中の時。設計と施工がかみ合わない度に現地でデザイン調整の協議を行い、対応について私の考えを真摯に受け止め、適切なアドバイスをいただきました。広場が完成した後、専門監から「ハード整備が完成して終わりではない。これからは広場に魂（たましい）を入れていく取り組みが大事」との言葉が心に残っています。その後、長崎駅周辺まちづくり推進協議会を設立し、官民が協働して広場利活用の取り組みを重ねてきたことで、今日の賑わいある駅前広場の姿があるのだと思います。

森下翔吾（都市計画課）

「まちづくりの考え方を常にアップグレードする」景観専門監から学んだ数多くのご指導のうち、特に強いインパクトを受けた内容です。景観専門監には、将来のまちづくり構想について数多くのアドバイスを頂き、その中の一つに、「社会情勢が変わり、人の価値観も変わっているなら、まちづくりへのアプローチ方法や、課題の捉え方も変わってくる」。このことは、自分なりになんとなく意識していたものの、景観専門監との数多くの協議を行ううちに、いかに自分の考えが浅かったかを気付かせてもらいました。今後は、変わりゆく時代の流れを的確に捉え、常に自らをアップグレードさせる意識を忘れずにまちづくりに取り組みたいと思います。

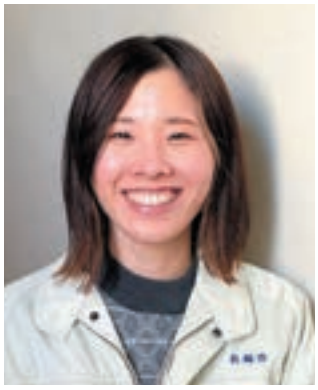
池田憲司（大型事業推進室）

まちなかの道路整備を担当した際、髙尾景観専門監と協議する中で、まちの歴史だけではなく、今そこに住む人や訪れる人の活動にもデザインのヒントが隠されていることに気づくことができました。ただ過去の歴史を忠実に再現するのではなく、今生活している人の使いやすさや暮らしやすさを考えながら、新しい要素をデザインの中に加えていく。歴史ある長崎でそういった仕事をすることに責任の重さを感じつつも、図面をいろんな角度から眺め、何度も現場に行き、イメージしたものが形となって出来ていく過程にこれまで以上に仕事の楽しさを感じ、完成後に地域の方から喜んでいただいたことに達成感とやりがいを感じることができました。これからも、この感覚を大切にしていきたいと思っています。

西尾希望（都市経営室）

髙尾専門監と出会い、「景観」は、モノではなく、見えるもの全てに含まれる時間や暮らし、ストーリーだと感じるようになりました。以前、案内板作成で髙尾専門監に案内板の素材や表記の内容を相談した際に、「どういった素材なら時間を経て馴染んでいくのか」、「地域で大切にされているものは何か」と環境やくらし等の目線からアドバイスをいただき、こうしたことの積み重ねが景観をつくっていくのだと実感しました。こうした視点は事務系の業務でも生きることが多く、仕事に対する新たな視点を知ることができ、よい経験をさせていただきました。

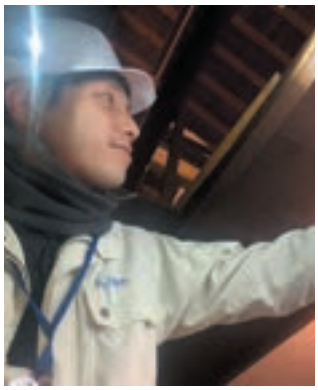
伊藤琴美（建築課）



景観専門監との協議では、自分では思いつかない視点のアドバイスをいただき、多くの発見があります。あぐりドームには、空しか見えない中庭があるのですが、その中庭に面する外壁の色を決める際に、「となり合うのは空だから」と、空に外壁のサンプルをかざした時は衝撃を受けました。これまで、周りの建物や、工作物との相性には気を配っていましたが、空との相性は考えたことがありませんでした。少し遠くから現場を見ると、私たちの仕事が風景の一部を構成することを実感します。歴史ある長崎の風景を邪魔せず、そして少しずつ良い景色になるよう、景観専門監から学んだことを仕事に活かしていきたいです。

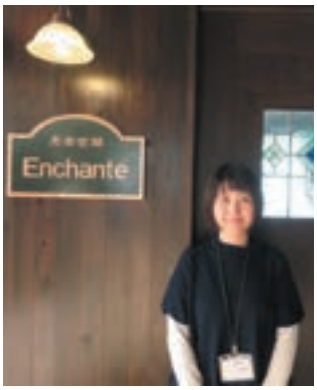
松本裕太（設備課）

髙尾景観専門監との協議で特に印象に残ったのが、稲佐山スロープカーの駅舎や遊歩道の整備に関して、屋外の電気設備の色や照明の当て方に関しての協議でした。電気設備は、一般の人が気にして見るものではなく、できるだけ目立たせないよう周囲と同じが良いと考えていましたが、「安易に同じ色にするのではなく、時にはアクセントを付け、周囲の景観に自然に溶け込むかが大事!」とのアドバイスをいただきました。また、間接照明の光の当て方についても、「夜間の雰囲気づくりが大事で、スロープカーを待っている人が直接光源を見ることないようにし、やわらかい温かみのある空間を作ることが大事である。」というアドバイスをいただきました。普段は気にもとめない照明が昼間には周囲に溶け込み、夜間には空間の雰囲気を作り出す役割を果たすことを実感し、設備はただ機能すればよいというものではないということを学びました。現在は、長崎駅東口広場整備事業でも携わっていただいています。単に設計図を具現化するだけでなく、長崎市の景観がより良いものになるよう心掛けて、日々の業務に励んでいきたいと感じています。



石橋佑治郎（設備課）

髙尾景観専門監とは長崎市の夜間景観整備の業務を通して、様々のことを学ばせていただきました。夜間景観整備業務では、長崎の夜間景観を照明設備によるライトアップで整備していく、といったものだったのですが、設備を設置するにも、どのような形状、どういった色味の器具を設置するべきかを現地に出向き、雰囲気や、周辺の建物や構造物に合わせて選定していくことの大切さを教えていただきました。ただ設備機器を設置するだけではなく、完成後の景観を想像して違和感なく溶け込ませることの難しさ重要さを教えていただきました。



林田沙緒里（遠藤周作文学館）

遠藤周作文学館に併設するエリアを新たに「思索空間」として改修するプロジェクトで行われた景観専門監との協議では、「居心地のよい空間」を目指すにあたり、空間の設計や材質の議論以上に、なぜその場所に、それをつくるのか、という議論が重視されていたと認識しています。遠藤周作文学館の文脈に相応しい「居心地のよい空間」を模索する姿勢は、迷走していたこの空間デザインの、ひとつの軸となりました。その時の専門監の「空間で過ごす人も風景の一部」という言葉が、現在の「思索空間アンシャンテ」の魅力を示唆していたと思います。

田中希和（長崎学研究所）

東山手・南山手の市有の洋館等の活用は、長崎市の積年の課題であり、地域の関心も高い事業です。文化財課の担当者だった私は、地域の思いと行政の論理がぶつかる場面に何度も直面しました。「言葉そのものではなく、内包された思いのエッセンスを汲み取るんだよ。」専門監のこの言葉が、多様な意見に迷う私の道標になりました。どの意見にも、必ず誰かの願いが込められていました。意見の本質を見極め、その願いに寄り添い合うことで、洋館等が魅力的に活用され、市民の宝として末永く愛されるイメージを、地域と行政が共有できるようになったと感じます。担当者の小さな不安や拙い報告にも、一緒に悩み、喜んでくださる姿も印象的でした。

井上洋子（職員研修所長）

髙尾先生の研修は、「長崎のまちならではのオリジナリティについて」、「価値を高めることがどうして必要なのか」など、事業を行う中で職員が大切にしなければいけないことを理論的に、分かりやすく職員に伝えてくださいます。先生から刺激を受ける職員はとても多く、研修後は、目を輝かせながら、先生と一緒に働きたい!と話をしにくる職員も。研修を一緒に企画させていただくたび、先生の前向きな姿勢、人材育成への思いに触れ、私自身が育成されています。髙尾先生から学べる環境にある長崎市職員はとても幸運です。今後ともどうぞよろしくお願いします。

濱崎高行（まちなか事業推進室長）

髙尾先生との最初の出会いは、長崎市景観専門監に着任されて最初の「長崎駅周辺再整備事業」に係る打ち合わせだったかと記憶しています。先生からは、「その場所の価値を創出していくこと」の重要性をあらためて教えていただきました。また、先生は、常に、若手職員が、自ら考え、仕事に喜びを感じていくような指導をなされており、次の時代の職員が育っていると感じています。若手職員は、難題にぶち当たることもあるかと思いますが、乗り切った後は、成長した自分に気付くことができ、景観意識の高い職員が増えることで、長崎市の魅力が絶え間なく向上していくものと思います。

田邊　猛（建築課長）

建築職員はどちらかというと敷地内のことだけに目が行きがちで、まちとのつながり（物理的・時間的）やどのようにしたら利用者にとって使いやすい（心地よい）空間になるのか、という視点が不足している部分がありました。ここ数年、これまで様々な建物の設計・施工の際に行ってきた専門監との協議を通して、そういった視点の大切さを理解し、成長している職員が年々増えてきているなと実感しています。今後も、引き続き専門監のアドバイスをいただきながら、施設所管課、設計者等、関係者が1つのチームとしていいものづくりを続けていけるようにできたらと思っています。

嶋本千秋（景観推進室長）

私と髙尾景観専門監とはこの10年のうち半分以上を同じ職場を共にしている。はじめて景観指導及び助言をいただいたのは、ある斜面市街地に新設する公園の整備であった。設計はすでに過去に出来上がってたものであったが一般的な小公園の仕様を充分満足するものであった。しかしながら小さな子供も遊べないような窮屈な施設等の配置となっていたため、設計見直しの厳しい指導を受けたことを覚えている。また、現場ではレイアウトを修正した図面を片手に斜め横から自分が図面の縮尺に合わせた人の目線で監修する姿は目から鱗が落ちたような気がした。

これまでの10年の間で専門監から指導や助言を受けた職員は着実な成長を遂げ周囲をけん引していく存在であり、今もこれからの将来も長崎市の貴重な人材になったと言えるでしょう。専門監は特に中心部では今この時の100年に1度の変革期を見据えた10年前の小さな種まきから始まり、これまで数え切れないほど長崎市へ足を運び、積み重ねた成果により、樹形や色彩の整った心地いい並木道の様にメリハリのある長崎らしい街並みへと導いてくれた救世主のような存在である。

平和公園の一連の改修

祈りの空間である爆心地を国道側の喧騒と区切るための緑のトンネル効果を残しながら、新たに取得した用地を含めて歩行者通行空間を確保した。

「連句の精神」で付け足す

この10年間で平和公園の20箇所近くの改修整備を監修しました。爆心地ゾーンエントランスや平和の泉周辺等の改修（みどりの課）、祈念像横のシェルターの設置（地域整備課）、祈念像ゾーンや資料館ゾーンのトイレ改修（建築課）、案内サインの設置（景観推進室、被曝継承課）、諸外国からの寄贈モニュメント設置（被曝継承課）、野口彌太郎記念美術館サイン検討（文化財課）等、担当部局と改修時期がバラバラになるのが市役所組織の宿命です。**こうした体制で公園の改修を積み重ねていくと、その時々の事情が優先され、少しずつ公園全体のデザインの完成度が崩れていくのが一般的**です。

平和公園は世界恒久平和と非核への祈りを捧げる国際的な場にふさわしい空間デザインが求められる施設であり、特に1990年代前半に行われた大規模改修では公園全体のマスタープランに基づいた明確なデザインが隅々まで実現されていました。先人がつくってくれた公園の価値を損ねることなく、現代の利活用に必要な機能を付け加えていくことで、手をいれるほど公園全体の完成度が高まっていくことが理想です。

例えば、祈念像ゾーンエントランス改修整備においては、祈りの場である爆心地（公園のウチ）と国道側（ソト）のデザインを明確に切り分け、その境界にバッファーとなる植栽を配置した先人の整備をディテールまで尊重した上で、新たに取得した用地も含めた整備を担当職員と検討しました。「求められる機能を確保しながら整備したことに気づかれなかったら成功」と担当者に繰り返し話していましたが、完工後に現場を歩く人100人に行ったヒアリング調査では、およそ9割の方が整備前後で違和感を感じなかったと回答し、喜びを分かち合いました。

こうした整備は、まるで「連句」を詠むようなものです。前の人が詠んだ「上の句」に「下の句」をつけることで、「新たな世界観」をつくる。今度はその下の句に新たな上の句をつけて、また新たな世界観をつくる。ただし、誰かが詠んだ歌の真似はしてはいけない。常に新しい世界を求めて前進する。**先人たちが築いてきてくれたまちの価値を継承しながら、時代のニーズに応えた施設更新を行っていくためには、こうした「連句の精神」による姿勢が公共事業の現場に必要**だと考えています。

周辺環境との一体性や周辺区間との連続性に配慮しながら舗装や側溝、柵のデザインを検討した。
工事をするほどに公園としての完成度が高まるようにと担当職員と協議した成果である。

遺構への立ち入りを防ぐ柵についても、遺構や周辺環境との一体性を考慮してデザイン検討した。

ししとき川通り

長崎市都市景観賞奨励賞2015（官民協働によるまちづくり賞）

路面の勾配、郵便ポストや電柱の位置等を考慮しながら、石畳舗装の線形を検討し、視覚的な歩きやすさを確保した。
整備後は通行者数が格段に増加した。

全体を意識して部分を積み上げる

寺町エリアの東側（山側）に流れているししとき川沿いの街路修景事業で、古写真をもとに、真ん中に石舗装、両側に土色のカラー舗装、川側は透過性の高い転落防止柵とする整備でした。最初に現場を訪れた時には既に整備した区間があり、前年度、前々年度にそれぞれ整備した区間の石舗装が、お互いにそっぽを向いていました。

協議で理由を確認すると、ししとき川通り全体の整備図面がなく、予算がついた区間から随時設計・施工したため、その結果、前年度の区間と前々年度の区間の石舗装の線形が連続していなかったのでした。**通り全体を見ながら部分をつくる、という意識がなく、年度ごとに与えられた範囲で仕事をする行政職員の悪い癖がカタチになってしまった事業**でした。

ししとき川通りはまっすぐではなく、全体にわたって微妙に曲がっています。また、交差する道路との擦り付け等で微妙なアップダウンがありました。道路上には電柱や郵便ポスト等もあります。こうした変化を考慮して石舗装の線形を引いていくように現場で協議しました。最終的には現場で墨出し（白粉で整備ラインを引く）しながら微調整して、細かく協議を行いました。石舗装によって明示された道路線形がなめらかで、きれいであればあるほど、人が快適に気持ちよく歩ける空間になるので、ここがこの道路デザインの肝になるからです。

上記のような点に配慮して整備した後は通行者数が目に見えて増加し、沿道にお店が複数出店、地域の活性化に貢献する事業となりました。施工担当の土木維持課・平野係長（当時）が「工事して「ありがとう」と言われることはめったにないので嬉しいです」と目を細めていたのが印象的でした。**通り全体を意識して、利用者目線でディテールまで工夫してつくると市民の皆様に喜んでもらえる、**そんな成功体験をした事業であったと思います。

前年度までに整備された区間は、年度ごとの整備範囲しか念頭になく、通り全体を考えて施工されていなかった。

地域の皆様と市長をはじめとする職員で開催した完成式典の様子。地域の方から「ありがとう」と言われた担当係長の笑顔が印象的でした。

鍋冠山公園展望台

長崎市都市景観賞奨励賞2019（公共施設部門）

まちや港の動き、音が感じられ、5つの世界遺産がみえる、この場所固有の風景体験を楽しんでいただく建築計画を検討しました。

必要条件だけでなく十分条件を考える

鍋冠山公園展望台と駐車場、アクセス遊歩道をリニューアル整備した事業です。初回の協議で、担当の大久保さんが、「鍋冠山公園再整備の基本方針（2002）」に示された「バリアフリー化」を実現する平面計画を複数案説明してくれましたが、どのプランも魅力的には見えませんでした。**「バリアフリー化」は事業を実施するための「必要条件」であるのに、それをそのまま「十分条件」にしていた**からです。これも行政職員が陥りがちな思考です。「利用者にどのような風景体験を提供するか」を考えることが展望台の価値を高めるために必要な「問い」です。良いものづくりには良い「問い」を立てることが重要です。

鍋冠山展望台での「風景体験」を考えるために現場で協議をしました。鍋冠山は標高169mでまちの動きや音がよく感じられます。さらに現場協議を続けていると、展望台から5つの世界遺産が見えることを「発見」したのです。沖に軍艦島が見え、眼下に造船所を望む、まさに長崎を舞台とした日本の近代化を体感できる眺望点でした。この魅力をきちんと表現しようと話しました。

「まちや港の動き、音が感じられる」「5つの世界遺産がみえる」という二つの魅力を利用者に最大限味わってもらいながらバリアフリー勾配を確保するため、視点場を既存の展望台よりも前に移動させ、長崎港と5つの世界遺産をぐるっと見渡せる回廊形式としました。階段やスロープをワクワクしながら上がってもらい、回廊に出た途端に「わぁ～」と声があがるような、そんな体験をイメージして設計しました。

実施設計から担当の坂本さんとは、基本設計案の3分の2程度の建設予算しか与えられなかったため、利用者の体験の質を落とさずに予算内で整備をするための見直し作業を繰り返しました。この作業はネガティブな印象もありますが、基本設計で検討した整備内容の骨格を守ることで事業の質を維持することができました。**行政職員は最初から予算内でできることを考えがちですが、ビジョンを持った上で予算や工期の範囲でどう実現するかを考えることが重要**です。

展望台完成後、車椅子や高齢者の姿を多く見かけるようになりました。周辺住民の方々がゆっくりとお話されている姿も見かけます。それぞれの利用者にとっての**「私の風景」が積み重なることで、この場所が「みんなの風景」になる**と実感しました。**「バリアフリー」は物理的なバリアを取り除くだけではなく、他者と体験を共有することで初めて実現する**ものだと思います。

変化があって飽きのこない風景をゆっくりと眺める来園者が増えました。

親子連れや高齢者、車椅子の方のお姿を多く見るようになりました。

深堀ふれあい広場

都市景観大賞2018景観まちづくり・教育部門優秀賞（会長賞）

地域主催で開催された完成式典の様子。前夜の雨の影響で舗装がまだら模様になっているが、駐車位置のガイドラインになる舗装が見て取れる。

駐車場と広場のリバーシブルデザイン

深堀地域センターと深堀神社に隣接する二つの敷地を駐車場用地として取得し、イベント開催時は駐車場として、日常的には広場として利用できるよう整備した事業です。

整備内容は市民ワークショップで検討し、髙尾が全体ファシリテーションを務めながら、長崎大学や九州大学の学生にグループファシリテーターをしていただきました。参加いただいた市民の皆様の熱心な議論を踏まえて、4回目までで①二つの敷地の機能分担、②支所に近接した敷地の12の整備方針が整理されました。

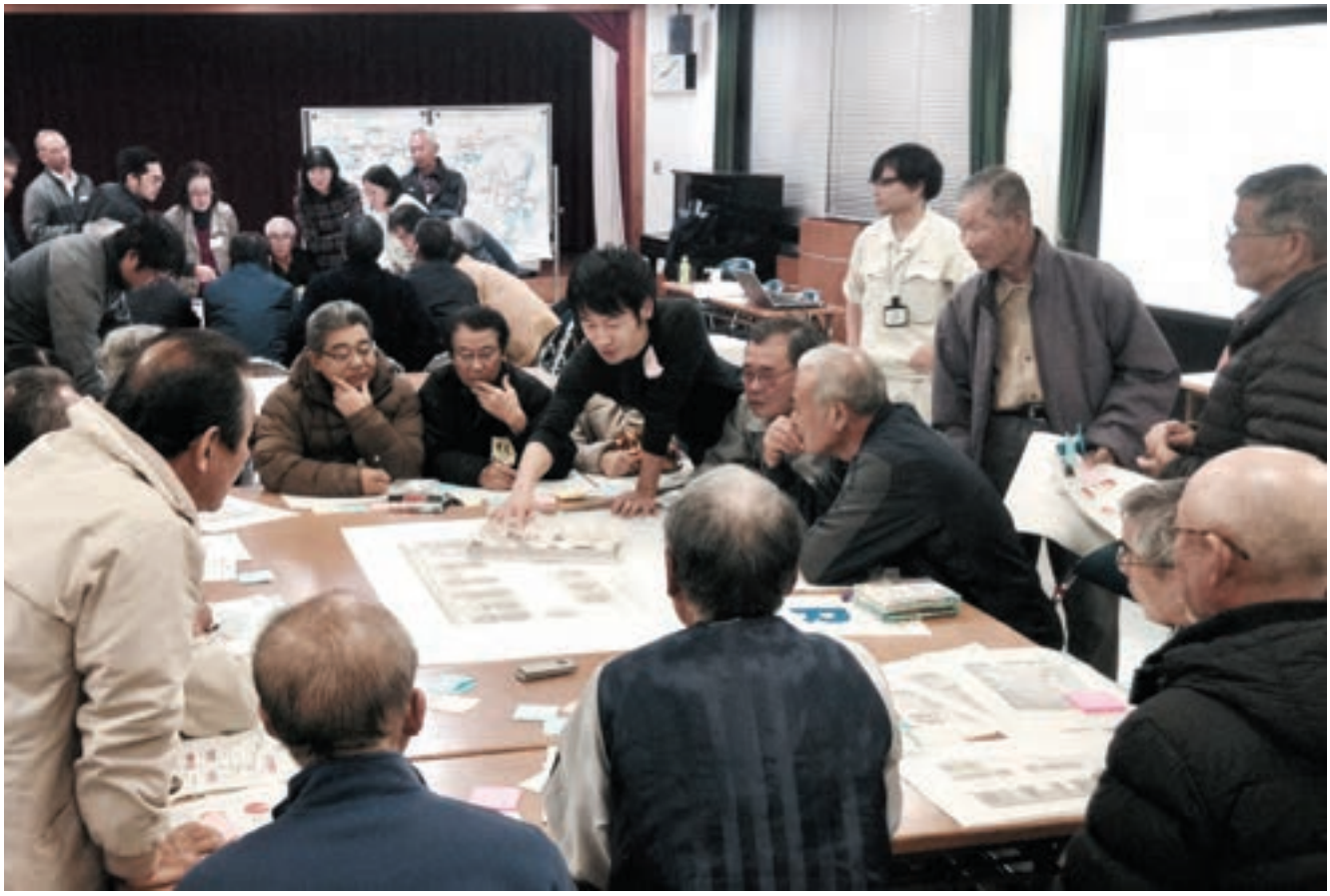
市民ワークショップの企画運営は、岩原川プロムナードに続き平山さん（当時まちづくり推進室）が検討、調整してくれました。**参加者から様々なアイデアを引き出す「発散型」だけでなく、具体的な整備内容を決めていく「集約型」の市民ワークショップをプログラムする能力が、これからのまちづくりにおいて職員にますます求められる**と思います。

具体的な整備案の検討にあたっては、九州大学大学院芸術工学研究院で建築を専攻する角玲緒那君と糸数景君から図面と模型を使った提案をしてもらい、市民の皆様に意見交換していただきました。その結果を踏まえて九州オリエント測量設計株式会社（当時）とともに舗装材や植栽の樹種、街灯の製品等の詳細設計を詰めていきました。

もっとも悩んだのは、「駐車場としても機能するけれど、日常的には広場となるために駐車場に見えない」というリバーシブルな機能を実現するためのデザイン検討でした。たくさんのパターンをスタディし、車二台分の幅を基本としたグリッド舗装パターンを採用しつつ植栽を配置することで、駐車場利用の目安を示しながら、ヒューマンスケールな広場を実現しました。その他、石塀の復元的整備や地域ガイドに活用できるパネルの掲示、イベントや清掃に利用できる給水やコンセント等についても細かく検討しました。

施工段階ではベンチ塗装を市民参加で実施しました。広場の名前も地区で応募し、自治会連合会で話し合って「深堀ふれあい広場」に決まり、完成式典も地区主催で開催、龍踊りが舞ったり、餅まきがあったりと盛大に行われました。深堀地区のまちづくり活動の拠点的な空間としてこれからも活用されていくことと思います。

今後、長崎市でも地域活性化の手段として多様な活動を実現する広場空間の重要性がますます高まっていきます。**イベント時、日常時、様々なフェーズの利用を市民の皆様と検討しながら、それらを受け入れるパブリックデザインを実現した先例**として、これからの取り組みの参考になればと思います。



九州大学大学院生からの提案をたたき台にして市民の皆様に意見交換していただいた。 模型を囲むことで、より具体的な意見をいただくことができた。

地域ガイドのスタート地点として広場を活用できるように広場を囲う塀に設置した地域情報パネル。 手前は地域住民で塗装したベンチ。

出島表門橋・出島表門橋公園

都市景観大賞2021都市空間部門大賞（国土交通大臣賞）
土木学会田中賞2018
日本建築美術工芸協会AACA賞2018
長崎市都市景観賞2019（公共施設部門）

出島を尊重するデザインとしながら、出島側には荷重をかけずに、ただ触っている（乗っている）だけ、という最先端の技術でつくられた出島表門橋。

プロポーザル公募書類は”ラブレター ”

出島の表門と対岸を結ぶ歩道橋を架橋し、出島の対岸に公園を整備した事業です。国指定史跡である出島は、国内だけでなく世界的にみても歴史的に重要な場所です。長崎市が1951年から復元整備事業を進め、市民も2000年頃に10億円の「出島復元基金」を集め、日蘭交流の舞台としても活用されてきました。また、出島対岸用地を21年間かけて公有化し、悲願であった表門橋の架橋、橋を渡って出島に入る「ルートの復元」が可能となりました。

こうした背景、これまで取り組まれてきた先人たちの思い、これから出島が担う社会的な役割を思えば、ここに架ける橋はただ渡れればいいのではなく、出島とともに歴史的景観を構成するために出島にふさわしいクオリティを持っていなければなりません。そして、公園も橋とトータルにデザインされる必要がありました。

良いデザインを生み出すためには、「設計条件」と「検討体制・プロセス」の設定が重要です。プロジェクトリーダーの池田さん（当時建設局長）の部屋に、月に2回程度関係職員が集まり、半年余りの時間をかけて議論しました。ここで侃侃諤諤と議論したことがこのプロジェクトの成否を分けたと思います。

明治時代の中島川変流工事で川が拡幅されており、治水上の観点からも江戸時代のような橋を復元することはできません。紛らわしいものをつくってはならないという文化財のルールに従って、むしろ最先端の橋を望むこととしました。河川内には橋脚は1本だけ設置可能、出島には荷重をかけず、掘削も表面のみとする等の条件を整理していきました。

プロポーザルの説明書、仕様書等は、嘉松さん（当時みどりの課、後に道路建設課で表門橋担当）が何度も書き直して作成してくれました。橋担当の土木部道路建設課、公園担当のまちづくり部みどりの課、出島復元担当の文化観光部出島復元整備室が**3つの部を超えて協働し、基本計画・基本設計・実施設計をまとめて24ヶ月間（3ヵ年）の業務としてプロポーザルを実施**しました。橋梁、公園、文化財、景観に関する専門技術者の配置を求め、審査基準や点数配分もこちらの思いが応募者に届くように慎重に設定しました。**プロポーザルの公募書類はまだ見ぬパートナーへの「ラブレター」**だから、何よりもこちらの思いが伝わるように市民の思いを代表して書こう、と話しました。

波乱万丈の設計、施工での検討協議を経て、デザイン的に多くの創意工夫がされた橋と公園が完成しました。橋ふき活動や出島宵市等の市民活動が行われ、市民や観光客が出会い、交流する場所として活用されています。**出島の歴史的景観に面した水辺空間での「長崎でしか体験できない時間」が、「交流の産業化」を目指す長崎市の未来の風景を示している**と思います。

夜間景観もトータルでデザインされている。水辺に誘う優しいあかりをたどっていくと自然と表門橋にたどりつく。

優しいあかりに包まれながら、出島のライトアップとお月様を眺める水辺の風景は、長崎でしか実現できない。

遠藤周作文学館思索空間アンシャンテ

アンシャンテの夕景は感動的。訪れた人も風景の一部になる。

心の居場所をつくる

遠藤周作文学館に併設する喫茶室の機能見直しを行い、「思索空間」として再整備した事業です。プロポーザルによって設計者が決まって景観専門監協議がスタートしたのが2017年12月11日で、2018年6月30日の「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」世界遺産登録までに実施設計、施工を行うという恐ろしいスケジュールでした。

大切にしたのは、この空間に「アンシャンテ」と命名された遠藤順子夫人が示されたコンセプト「此処へ来て、いつも、いつも、生活、生活と追われている人が、ちょっと生活から軸足を人生のほうにむけて、『人生とはなんぞや』とか、『人間とはどういうものか』ということを考える場所になればいい。幸い此処はとても夕陽が美しい場所であり、空を、海を見ながら、そういうことを考えて頂くのに相応しい場所ではないかと思う」でした。「アンシャンテ」とはフランス語で「出会えてよかった」という意味であり、この場所が、利用者が遠藤文学の「言葉」と、外海の「風景」と、そして「自分」と出会う思索空間になることを目指しました。

「遠藤文学とこの場所の風景を軸とした思索空間」という類例のない空間の検討においては、遠藤文学に精通する北村さん（遠藤周作文学館学芸員）の感性が、空間の密度やスケール感、暗さ、静けさ、外部環境との対比等を決めていくときの拠り所になりました。出島地区や恐竜博物館でも同様でしたが、**ストーリー性のある空間のデザインでは、学芸員の存在は極めて重要**です。

当初示された設計案は「木造教会」というコンセプトにこだわるあまり少々装飾的である一方で、椅子やテーブルは一律で単調な内容でした。現場で丁寧に協議することで、よくデザインされている既存建物を大切にしながら、それぞれの場所からの風景体験にあわせて複数のタイプの椅子や机を準備し、光環境や音環境、芸術作品の設置位置等も吟味して、利用者がその時のコンディションに合わせてそれぞれの居場所を選択できる空間にしました。また、ステージとして使える小上がりをつくる等、コンサートや朗読会等のイベント利用にも対応できる配置になっています。**コンセプトからカタチを導き出す思考に終始することなく、その空間での具体的な人の利用をイメージして居心地の良い場所をつくることが重要**です。

加えて、利用者それぞれがここで感じた思いを共有できるように、『あなたの心の中の遠藤文学』を投稿できる用紙ファイルを準備しました。リニューアル後、たくさんの方にご記入いただきましたが、抱えてきた苦労や悩みと向き合う時間をアンシャンテで過ごされたことが伝わってきます。たとえ一時でも、ここが利用者ひとりひとりの「心の居場所」になれば幸いです。

遠藤文学と風景と私だけの空間で、人は自分自身の本音と出会うことができる。

様々なタイプの椅子やテーブルとステージを、そこからの風景体験にあわせて配置している。

遠藤周作文学館コスモス花壇

子どもたちが苗植えをしてくれたコスモスは、秋に満開となり、文学館を訪れる人々の記憶に残りました。

予算ではなく協働でつくる

遠藤周作文学館の海側の斜面にコスモス花壇を整備する事業です。若手職員の金氏さん（当時みどりの課）からの申し入れで景観専門監協議が始まりました。予算は限られていて、2016年4月に初めて協議した時には100平米程度（幅15m×奥行7m）の花壇をつくる案でした。遠藤周作文学館の利用者からみると、花壇の向こうには角力灘の風景が大きく広がっています。原案のような整備ではスケール負けしてしまって、感動を呼ぶには力不足です。なんとかして、花壇を少しでも大きくする方法を考えました。私からは、職員で仲間を募り、苗植えを自分たちで行うことで、その分花壇を大きくできないかコメントしました。

次の協議で、金氏さんが提案してくれたのは、地域の学童と協働した苗植えイベントでした。文学館のバスで送迎し、コスモスの豆知識・作業内容の説明を行った上で、子どもたちと100株の苗を植え、記念撮影をするという**予算0円の企画**でした。その結果、花壇の大きさが180平米（幅30m×奥行き6m）となり景観的に向上しただけでなく、**学童児童が楽しみながら地域の環境づくりに参加する、ソーシャルキャピタル（社会関係資本）を高める事業**となりました。

後日、金氏さんが咲いたコスモスの種を袋に詰めて学童に届けに行ったとき、「あ!コスモスのお姉ちゃんだ!」と言われたことについて、「子どもたちが覚えてくれていたことが嬉しく、一過性のつながりでなかったことに喜びを感じた。思いを持って仕事に励めば、小さなゼロ予算の事業でも工夫次第で新たな価値を生み出すことができるということを初めて体現できた瞬間でもあった。感謝の気持ちを伝えたくて訪問したが、子どもたちから予想していなかった素敵なプレゼントをいただいた」と『遠藤周作文学館花壇コスモス企画報告書』に記載して、私に送ってきてくれました。私にとっても景観専門監冥利に尽きる経験となりました。

平和祈念式典生花パネル

2本の交差する黄色い線で、平和な世界を願う被爆者とその思いを受け継ぐ若い世代を表現し、平和を象徴する白い鳩が羽ばたく、美しいデザイン。

たった一日でも大切な景観

2020年の被曝75周年記念事業として、毎年8月9日に開催される平和祈念式典の平和祈念像基壇部生花パネルのデザイン変更を検討した事業です。被爆者の平均年齢が80歳を超え、被爆者数が年々減少する中、平和や非核のメッセージ発信を強化し、被曝の実相の継承と平和意識の醸成を目的とした取り組みです。それまでのデザインは被曝50周年から続いていましたが、こうした背景から75周年を機にデザインリニューアルすることとなりました。

2019年6月17日～9月5日まで、全国の中学生、高校生を対象にデザイン案の公募を行い、120件の応募をいただきました。最優秀賞を選考する審査会の開催にあたって、「意見聴取者」という立場で、デザイナーの山崎加代子さん、長崎花き組合の皆様とともに意見を述べることになりました。素晴らしいデザイン案が多く、選考の議論は白熱しましたが、最終的に長崎商業高校1年（当時）の吉田陽向さんの案が最優秀賞となりました。2本の交差する黄色い線で、平和な世界を願う被爆者とその思いを受け継ぐ若い世代を表現し、平和を象徴する白い鳩が羽ばたく、美しいデザインが高く評価されました。

選考後は、デザイン案の実現に向けて、花き組合の皆様と協議を積み重ねました。正面から見たときに「原爆犠牲者之霊」の碑と重ならないように白い鳩の位置を少し左に修正しましたが、デザインは極力原案のままとしています。2本の黄色い線を花でどのように表現するか、その幅（太さ）を検討するのに**実物大の部分模型を現場に持ち込んでもらって協議**を行ないました。2020年度始めは新型コロナウィルスの影響で景観専門監が現地にいくことができず、担当の川端さん（被曝継承課）たちと不慣れなオンライン協議で議論したことも思い出深いです。川端さんたちが熱心に取り組んでくれたお陰で、最終的に原案のメッセージと美しさを表現した生花パネルが実現しました。

生花パネルは8月9日の平和祈念式典で掲示される、1年間で1日だけみられるものですが、田上市長が被曝継承課との協議で「これも景観だから、景観専門監と協議してください」と言われたことで景観専門監監修プロジェクトとなりました。通常は30年、50年に渡って毎日目にする公共空間のデザインに取り組んでいる景観専門監ですが、**1日でも未来に継承する大切な景観がある**、ということを教えていただいたプロジェクトとなりました。

稲佐山電波塔ライトアップ

長崎市都市景観賞奨励賞2017（夜間景観部門）

市民の日常風景となる「見上げる夜景」という新しい夜景カテゴリーを創出したプロジェクトとなった。

新しい夜景カテゴリーを創造する

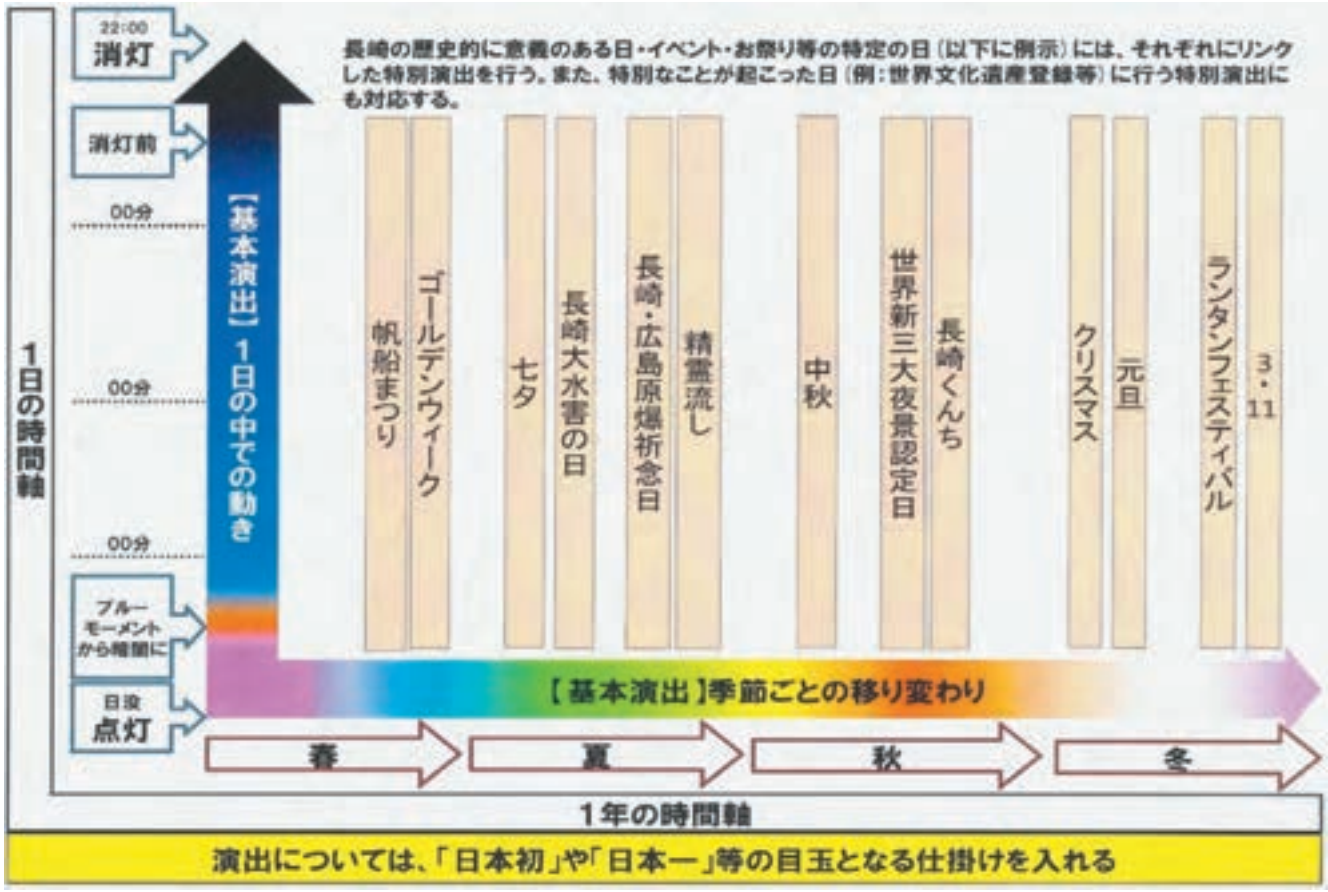
稲佐山山頂にある3本の電波塔をライトアップした事業です。2014年10月の「長崎がんばらんば国体」に対する「光のおもてなし事業」として商工会議所青年部が実験的に実施した際に好評であったことを受けて、長崎市として本格整備することとなりました。民間と行政の協働による素晴らしい取り組みです。

これまで稲佐山展望台から「見下ろす夜景」一辺倒だった長崎市の夜景に、まちなかから「見上げる夜景」という新しいカテゴリーを創造することを目指すプロジェクトです。担当の橋村さん（当時観光政策課）とは、**市民の日常の中にあり、市民に愛される風景こそが、観光客にとっても魅力を持つ**という考え方を確認し、**毎日見上げる市民にとって良いデザインを考えよう**と話しました。

橋村さんが検討してくれたのがライティングプログラムです。日常的な光は夏場（4～9月）と冬場（10月～3月）で色温度を変化させる、00分や30分といった時報的なタイミングでの演出を春夏秋冬で変化させる、ランタンフェスティバルや長崎くんち等のイベントにあわせた演出を設定する等、**市民の日常生活に電波塔の光が染み込んでいくプログラム**を検討しました。

その上で実証実験を行いました。実際に照らしてみてわかったことは、電波塔がもともと赤と白の縞模様で、照明を足元にしか置けないため、きれいに表現できる色とそうでない色があること、明るく照らせる部分とそうでない部分がある、と言ったことでした。そうした実証実験での知見を、また演出プログラムにフィードバックする、その繰り返しで検討を詰めていきました。

2016年4月に点灯されてから、SNS上で「#稲佐山」の投稿を観察しています。当初は稲佐山展望台から見下ろす夜景が中心でしたが、展望台から電波塔ライトアップをみた投稿、さらに、まちなかから電波塔ライトアップを見上げた投稿が中心となり、最近では昼間に稲佐山を見上げる投稿も増えました。**「見上げる夜景」という新しい夜景カテゴリーを創造するとともに、市民にとって稲佐山がより一層精神的な拠り所になった**と感じています。長崎のまちでの暮らしの質（QOL：Quality of Life）の向上にも貢献する事業になったと思います。



担当した橋村さん（当時観光政策課）が作成してくれたライティングプログラムに関する資料。長崎のまちの歳時記と連動した内容となっている。

写真左の稲佐山山頂の電波塔に照明をつけたことによってまち全体の夜景に新しいインパクトを与えた。
公共事業は常にまちの「部分」しか扱えないが、そこから「全体」に及ぼす波及効果を考えることが重要である。

長崎まちなか夜間景観

土木学会デザイン賞2021優秀賞
照明学会照明デザイン賞2020入賞

平和祈念像の夜景（写真：Lighting Planners Associates）

夜景をふるさとの風景にする

平和祈念像や爆心地、諏訪神社、眼鏡橋、中華門、出島、大浦天主堂等、まちなか50箇所以上の夜間照明を整備した事業です。長崎市は、1993年に「ライトスケープ計画」を策定し、石井幹子氏を監修者として夜間照明を面的に整備しましたが、照明技術の進化や時代のニーズの変化に対応した更新時期を迎えていました。

2016年、まちなか夜景に関するマスタープランを策定するにあたって、シンガポール等での都市照明デザイン、世界各地での市民による照明探偵団の実績がある面出薫氏に監修者を依頼しました。観光客をターゲットにした派手な夜間照明ではなく、毎日眺めても飽きのこない上品な夜景、長崎のまちが持つ歴史や文化に調和した深みのある夜景を、光だけでなく陰や闇も含めてデザインしていただけるのは面出薫氏を始めとした（株）LPAの皆様しかいなかったと思います。

マスタープラン策定にあたっては、平和町、寺町･中島川、東山手･南山手で、夜景をテーマにした市民ワークショップ「長崎照明探偵団」（のべ120名参加）を開催し、あわせて「長崎夜景シンポジウム」（170名参加）やパブリックコメント等で得られた市民意見を踏まえて、「環長崎港夜間景観向上基本計画」を策定しました。このタイミングで長崎市が国の「景観まちづくり刷新支援事業」のモデル地区に選定され、国の支援のもと計画の実現に向けた整備事業を行うことができました。整備にあたっては、現場での点灯実験により照明の位置や高さ、角度等を調整し、あわせて昼間に周辺景観と調和するように照明器具の配置や色についてもひとつずつ協議を行いました。

平和祈念像は、原爆を示す右手と平和を示す左手をスポットライトで照らし、祈念像のメッセージをより強く発信するライティングになりました。また、祈念像前で振り返ると平和の泉の向こうに稲佐山電波塔ライトアップが見えます。戦後、「祈念像～平和の泉～稲佐山」という眺望を軸として平和公園が整備されていたことが顕在化されました。眼鏡橋も昼よりも眼鏡に見えるライティングが実現しています。**夜景だからこそ昼よりもより一層地域の歴史や文化を際立たせることができ、市民や観光客の皆様との共感を生み出すことができる**のではないかと思います。**まちなか夜景は、市民の皆様にとってのふるさとの風景となりながら、夜景をテーマとした交流産業を支えるまちづくりのインフラになってきている**と考えています。

眼鏡橋の夜景（写真：Lighting Planners Associates）

眼鏡橋付近の中島川プロムナードの夜景（写真：Lighting Planners Associates）

稲佐山スロープカー

国際交通安全学会2021年度学会賞（業績部門）

夜間のライティングも含めて車両、駅舎、軌道、軌道下遊歩道等を一体的にデザインした。

風景を移動する

稲佐山山頂にアクセスするスロープカーを整備した事業です。稲佐山山頂へはマイクロバスが直接乗り入れできず、ロープウェイは大人数を運べないため、修学旅行のような団体客に対応できるように2両で80人が乗車できるスロープカーを、マイクロバスに対応している中腹駐車場から山頂まで整備することになりました。

整備事業は、①車両、②軌道、③山頂駅舎、④中腹駅舎、⑤中腹駅舎周辺、⑥軌道下遊歩道から構成されていました。これらがバラバラではなく、トータルのデザインとなるようにデザイン協議を行いました。特に主役となる車両については、ロープウェイのデザインで功績が高い、世界的工業デザイナーの「Ken Okuyama Design」にお願いできましたので、そのデザインを軸に関連施設のデザインを検討していきました。

現場協議をご一緒した際、奥山さんは「稲佐山の素晴らしい自然環境がまちのすぐ近くで享受できることは長崎のアドバンテージだ」と話されていました。車両は天井から足元まで透過性を高くし、内部も樹木を感じさせるデザインで、稲佐山と一体感のある空間を実現し、夜間についても車両が美しく浮かびあがるライティングとなっています。

軌道については、山頂や中腹駐車場での周辺施設との関係で駅舎の位置を調整しながら、工事による稲佐山への影響を最小限にしつつ、西側に望む夕景がきれいに見えるような線形を検討しました。さらに、山頂や中腹の駅舎については、設計者の一級建築士事務所モーア・一丸さんに何度も図面を描いていただいて、車両が象徴的に見えて、かつ、使いやすい動線計画、昼夜の光環境についても協議を重ねました。軌道下の遊歩道についても、松本さん（設備課）と夜間照明について現場で協議し、グレアレスで安心感のあるデザインを検討しました。中腹駅舎周辺のトイレ設置や舗装整備についても、限られた予算の中で、車両や駅舎との一体的なデザインを検討しました。

実際にスロープカーに乗っていただくと、稲佐山の自然環境を身近に感じながら、西側に見える海への風景を望む、感動的な移動体験ができます。**展望台へのアクセス性向上を目的に整備されたスロープカー自体が、風景を移動する新たな視点場となり、その移動体験を車両だけでなく駅舎等も含めてトータルでデザインできたことで、稲佐山全体の価値が一層高まった**と感じています。

稲佐山の自然環境や海への眺望を移動しながら体験できる。

車両内部も稲佐山の自然環境と呼応したデザインとなっている。

長崎のもざき恐竜博物館・恐竜パーク

野母崎行政センターから対象敷地に向かう下り坂から見える軍艦島への眺望を守るために建物の左側を高く、右側を低くしている。

現場で境界を越えて調整する

2004年の恐竜化石発見を受けて、恐竜博物館を建設、その周辺を恐竜パークとして一体的に整備した事業です。恐竜博物館の展示や構成は教育委員会恐竜博物館準備室、建築設計・施工は建築課や設備課、恐竜パークは南総合事務所地域整備課、地域住民との協議は野母崎行政センターという役割分担になっていました。

施設配置を検討する際に拠り所となったのは、2015 ～ 2016年に長崎市主催で開催した「野母崎の未来を考えるワークショップ」で**地区住民の皆様からいただいた意見**でした。対象敷地の再整備によって野母崎全体が活性化するように考える、野母崎行政センターから対象敷地に向かう下り坂から見える軍艦島への眺望は守る等の意見を尊重して施設配置や高さを検討しました。

もうひとつ拠り所となったのは恐竜博物館準備室（当時）の学芸員であった中谷さんの存在です。恐竜学に関する幅広く、深い知識と、それを楽しくわかりやすく伝えようという熱意をもった中谷さんのアイデアが核となって、施設構成やデザインテイストが固まっていきました。出島や遠藤周作文学館と同様、**ストーリー性のある空間デザインにおいて学芸員の存在は重要**です。

恐竜博物館の建設が決定したのは2017年2月、その約1年後の2018年3月に基本構想が策定され、展示設計や基本・実施設計が発注されたのが2019年11 ～ 12月、そこから2021年3月までの約1年5ヶ月で基本設計、実施設計、施工という凄まじいスケジュールでした。各部局がこのスケジュールを目指してそれぞれの事業を進める中、**個別協議の積み重ねでデザインのトータリティを確保する状況となり、現場でのデザイン調整の比重が大きな事業**でした。

博物館の外観意匠や外構、パークの施設配置や舗装パターン、樹種、遊具の配置、サインの設置位置やデザイン等を、工事を進めながら検討し、最終的にエリア全体のトータルデザインを実現するのは難易度の高いデザイン調整でしたが、各部局の担当職員がお互いの境界を超えて調整し、現場でディテールまで揃える努力をしてくれました。

開業から1年で博物館が約27万人（目標の2.2倍）、パークを含めると約40万人の来場者があったことから、なんとか一定のクオリティを確保できたのではないかと感じています。この施設が起爆剤となり、野母崎全体が活性化していくことを願っています。

緑のテープから右側が建築の外構工事、左側が公園の工事である。厳しい条件の中、舗装材の仕様や敷き方を揃えるのは簡単そうで難しい。

オープン以来、博物館、公園ともに多くの市民にご来場いただいている。こどもたちの笑顔が、私たちにとって何よりのご褒美。

あぐりドーム

あぐりの丘の環境に馴染む、あたたかい雰囲気を持った建物となるように配置計画や色彩計画について慎重に検討しました。

違和感のない新しいもので場を再定義する

かねてより市民アンケートでニーズが高かった天候に左右されずに安心して子どもを遊ばすことができる「全天候型こども遊戯施設」を整備することで、長崎市北西部にある「あぐりの丘」の施設利用の活性化にもつなげる事業です。主担当はこども政策課、建築に関しては建築課や設備課が担当でした。

まず、あぐりの丘のどこに建設するかを協議しました。新しく大きな施設を建設するためには既存施設の一部を撤去する必要があるので慎重に議論しました。また、親子連れでの利用を想定すると駐車場からのアクセスが大事です。さらに、既存の屋外遊具との一体的な利用を促進したいこと、花畑等を維持して自然と触れ合う時間も提供したいこと等を考慮して、複数案から既存建物があった現在の位置を選定しました。駐車場、正門、花畑、既存遊具、未利用だったゴーカートレーン等の中心に配置することで、**既存施設を結びつけることを意識しての判断**でした。

続いて建築計画の検討では、子育て関連の専門家へのヒアリング会議を開催して様々な観点からのアドバイスをいただきながら、設計者選定プロポーザルで特定された（株）環境デザイン機構からの提案をもとに協議を重ねていきました。そうした中で、乳幼児から小学校高学年までが段階的に遊べる遊具が、連続した空間に順々に配置され、兄弟児がいても別部屋にならずにひとつの空間にいることができるカタツムリの殻のような建築計画が導きだされていきました。中庭は、全天候型という趣旨とは逆行しますが、空だけが見える不思議な空間であぐりの丘の風を感じ、気候が良い時には安心して子どもが遊べる空間として、また、施設内のどこでも自然光が注ぐ光環境となるように採用しました。

規模の大きな施設なので外壁の色や開口部の取り方等はかなりのスタディを行い、「あぐりグリーン」とも言うべき優しい緑色をテーマカラーとして採用しました。さらにはサインデザインや建物周辺の舗装材の選定、既存建物のリニューアルデザイン等についてもエリアとしての一体性とお子さんに喜んでもらえるような可愛らしさを意識して検討しました。

あぐりの丘にとっては、その真ん中に大きな異物を挿入した事業でしたが、建築計画や外観を慎重に検討したことで、**遠くから見ても近くから見ても違和感なくおさまった**と思います。その上で、**あぐりドームの存在によってあぐりの丘全体の性格が再定義され**ており、今後指定管理者を中心としてサービスプログラムがアップデートされていくことを楽しみにしています。

こどもの年齢が上がっていくに従って奥にある遊具にチャレンジできる配置とし、兄弟児を連れてきてもひとつの空間にいれるように配慮している。

開館以来、こどもたちの笑顔が溢れている。開館22日目で来館者1万人を達成した。

魚の町公園

地下駐車場出入口を1箇所撤去する等して、交差点側に開かれた公園とし、立体的に見えるように樹木を配置している。

公共空間を開放する

市民会館前の魚の町公園をリニューアルした事業です。向かいに新庁舎が建設されることで、①新庁舎前広場との一体的な空間として新たな利用が生まれること、②駅（ウォーターフロント）と眼鏡橋や寺町（まちなか）をつなぐ役割を担うこと、③新庁舎や眼鏡橋周辺と一体的な夜間景観を形成すること等から**大きく変化する場所のポテンシャルに対応したハード空間の更新**を行いました。

きっかけは2018年に開催された「九州デザインシャレット2018 in 長崎市」（風景デザイン研究会主催）でした。全国から集まった学生や若手社会人が3泊4日の合宿形式で、魚の町公園のリニューアルデザインを演習課題として取り組みました。その成果を庁内で共有する中で、新庁舎と一体的に再整備する検討が本格化しました。

まずは設計条件を整理しました。市民会館の利用者による副次的な利用、新庁舎側から中島川側へと通り過ぎる利用（逆方向も）、お弁当を食べたり休憩する利用、マルシェ等のイベント利用等、**多様な利用を想定しながら**、地下駐車場の出入り口やサイン、モニュメント、樹木等を減らしていく**「引き算」を検討し、空間の自由度を高めて**いきました。

その上で、既存樹木を生かした、開放的で立体的な広場空間を実現するための配置計画を検討しました。ここからの検討については新庁舎前広場の設計を担当されていた吉村純一氏（プレイスメディア）に全面的にご協力いただきました。担当職員の松藤さんや設計会社の皆様と一緒に上京して相談に伺い、その場で手書きで検討していただいた図面がその後の検討の基本となりました。

その後新型コロナウィルス感染拡大の影響による財政上の課題で2ヶ年工事の2年目の予算が半減となり、設計見直しを余儀なくされました。そのため樹木まわりの低木植栽等未整備な部分も残されていますが、デザイン上の工夫を様々に施すことで、当初から目指していた公園周辺に対して開かれた広場空間が実現しています。夜間照明も美しく、安心感があります。

今後、公園や道路等の公共空間を人のための空間として再整備する流れがますます強くなります。**公共空間が日常的なアクティビティの舞台になることが、まちでの暮らしの質を高め、賑わいを生み出すための必須条件**となります。長崎のまちなかには抜群の立地条件にある公園が多くあるにも関わらず、そのポテンシャルはほとんど生かされていません。いまだに**20世紀的な公園デザインにとどまっている公園を人のために開放していくこと**がこれからの課題となるでしょう。魚の町公園はその先進的な取り組みになると思います。

夜間にもあたたかい雰囲気の広場となるように照明をデザインしている。

オープン以来、イベントや日常的な休憩、待ち合わせ等に活用されている。
公園を自由な空間として人に開放していくために、管理者側の考え方や仕組みを変えていく必要がある。

新庁舎

市民ワークショップには中学生や高校生も含めて多くの方に参加いただき、新庁舎について熱心にご提案いただきました。

丁寧に市民と共有する

旧本館を中心に9棟に分散していた市役所機能を、1棟に集約する新庁舎を建設した事業です。1992年に建設整備基金が設置され、2010年頃から検討が行われてきましたが、基本設計の企画段階となる2016年から検討に参加しました。

検討に参加した当初、200億円を超える建設費、長崎のまちなかには見慣れない高層建築という条件に対して、反対や疑問の世論が強かったと感じていました。自分自身が納得していないと監修できないので、赤倉さん（当時大型事業推進室長）に数時間ヒアリングし、基本計画について様々な質問をさせていただきましたが、彼の説明からこれまで濃密な議論が行われてきた結果であることを理解しました。その上で、**これまでの議論と基本計画に対する関係者の理解を市民の皆様と共有すること**、そして、**これからの50年以上にわたって市民の人生を支える素晴らしい市役所にすること**が基本設計段階の目標だと考えました。

2017年3～5月に設計者選定プロポーザルを実施し、公開プレゼンテーションを経て、審査会にて山下設計JVが特定されました。この後、山下設計JVが市民の皆様からいただいた意見を柔軟に取り入れてくださり、現在のような新庁舎が実現しました。このプロポーザルで、建築だけでなく照明や外構も含めて**技術総合力が高い設計チームを選べたこと**が、このプロジェクトの大きな分岐点となりました。

あわせて、2017年7月に市民シンポジウムを、8～ 12月に5回の市民ワークショップを開催しました。シンポジウムで建設に対する疑問の声が多く聞かれたことから、ワークショップの第1回目では旧庁舎のフィールドワークを行い、旧庁舎のイイ所とイマイチな所を共有するワークから議論をスタートしました。その上で、基本設計案に対する感想、意見をいただきながら、新庁舎のあり方を議論し、建設の意義を市民の皆様と共有していきました。

シンポジウムやワークショップ、パブリックコメント等でいただいた市民意見は約1000件あったと記憶しています。これらを**「基本計画以前に対する意見」「基本設計に対する意見」「実施設計以降に対する意見」に整理し、ひとつずつ対応方針を検討**し、こどもフロアの配置計画や閉庁時も展望フロア等にアクセスできる建築計画、庁舎前広場のくんち仕様等、可能な限り設計に反映させていきました。

実施設計や施工段階でもたびたび景観専門監協議をしましたが、特に広場や展望フロア、市長応接室等については、「長崎らしさ」を埋め込むためのデザインを職員や山下設計JVの皆さんと議論しました。来庁者に喜んでいただける新庁舎にしたいという思いでディテールまで議論した分、新庁舎は一段と価値あるものになったと思います。

こどもフロアは、手続き時にこどもを近くで見ておきたいという市民意見を反映して、カウンターを円状に、その真ん中にこどもが遊べるスペースを配置した。

新庁舎全景

長崎駅周辺整備事業

長崎市都市景観賞2021（大きな建物部門）（出島メッセ・ヒルトン長崎）

長崎駅周辺全景。膜屋根をライトアップする等、エリア全体として夜間照明に配慮しており、稲佐山から望む夜景に新しいランドマークを与えている。

地道な対話の積み重ねがアウトプットの質を決める

新幹線開業に向けた長崎駅周辺整備事業は、在来線駅舎・高架橋（長崎県）、新幹線駅舎・高架橋（鉄道・運輸機構）、西口および東口駅前広場、多目的広場、街路、観光案内所（長崎市）、新駅ビル、かもめ市場、JR九州長崎支社（JR九州）、NBC社屋（NBC）、出島メッセ長崎（長崎MICE）等、**多くの事業主体によって長期間、面的に行われる事業**です。これらがエリア全体として「21世紀の国際交流都市・長崎」の陸の玄関口にふさわしいまちを形成するためには、**事業相互に調整する体制とプロセスが不可欠**です。

2013年4月の景観専門監就任当初から県、市の担当部局と協議を行い、2014年2月に「長崎駅周辺エリアデザイン調整会議」を設置しました。ここに鉄道・運輸機構、JR九州が委員として参加されたことで、後の鉄道施設や民間施設を含めたデザイン調整がディテールの協議まで深まることになりました。あわせて、2014年4月に「長崎駅舎・駅前広場等デザイン検討会議」を設置し、これら2つの会議において、「長崎駅周辺エリアデザイン指針」と「長崎駅舎・駅前広場等デザイン基本計画」というエリアデザインビジョンを策定、これらに基づくデザインの実践が今日まで続けられています。

長崎駅周辺整備事業では、①長崎駅舎・駅前広場等デザイン基本計画作成業務（2014年3月）、②長崎駅前広場等設計業務（2016年8月）、③長崎駅東口駅前広場実施設計等業務（2020年8月）、④長崎駅舎東口キャノピー等建設基本・実施設計業務（2020年8月）、⑤国道202号歩道橋設計等業務（2021年7月）について設計者選定プロポーザルを行ないました。県や市の担当者と業務仕様書等について議論を行い、①については新幹線駅舎のデザインも含めた業務とし、②については東西の駅前広場や多目的広場、街路等を一括した3カ年30ヶ月の業務とする等、様々な工夫をしました。

各事業の敷地境を超えてエリア全体として良いまちを実現していくためには、**目指すエリアビジョンを関係者で共有しながら、それを実現していくための「地道な対話の積み重ね」が重要**です。新幹線駅舎と在来線駅舎のデザインの一体性、出島メッセ長崎やかもめ市場、新駅ビルと駅舎や駅前広場とのデザイン調整等、上記の検討体制において数えきれない程の関係機関協議を積み重ねてきており、景観専門監はそのセッティングやコーディネートを務めてきました。今後もかもめ口（東口）の新駅ビル、駅前広場、多目的広場、歩道橋等の整備において、**ディテールまで調整したデザインを実現することが、エリア全体としての価値を高めるために重要**と考えています。

あわせて、東西駅前広場や多目的広場、歩行者専用道路、新かもめ広場等が、**一体的に活用され、日常時も、イベント時も、災害時も市民や来訪者を受け入れる空間となることが重要**です。関係者の皆様に呼びかけさせていただき2021年からスタートした勉強会を経て、2022年5月に「長崎駅周辺まちづくり推進協議会」が設立し、関係者の信頼関係と協働による活動が続けられていることは、**「つくる」と「つかう」が連動した取り組みとして、今後の長崎市のまちづくりの規範になる**と考えています。

在来線駅舎（左）と新幹線駅舎（右）を一体的に、ひとつの駅舎としてデザインしている。
これほど在幹が一体となった駅舎は、おそらく日本で初めてだろう。

新幹線ホームからは長崎港を望むことができる。新幹線利用者の乗降がないホーム先端（滑走余裕長区間）も一般利用ができるように整備している。
また、先行整備された県警察本部（左）と県庁（右）は、長崎県が進めてきたアーバンデザイン会議での協議によって駅正面を避けて建設されていた。

在来線駅舎（右）、いなさ口（西口）駅前広場、西通り線、出島メッセ長崎（左）を、色彩や舗装材、植栽、夜間照明等、様々な点で一体的にデザインしている。

ヒルトン長崎（左）と出島メッセ長崎駐車場（右手前）およびNBC新社屋（右奥）に挟まれた歩行者専用道路でも、稲佐山への眺望を象徴的にみえるように沿道施設との一体的なデザインを実現している。

デザイン調整の成果のひとつとして出島メッセ長崎の屋上空間が利活用できるように整備され、長崎ならではのアフターコンベンション企画が実施されている。

出島メッセ長崎の開業にあわせていなさロ（西口）駅前広場で実施された利活用社会実験。
たくさんの来場者があり、利活用に手応えが生まれたことで、「長崎駅周辺まちづくり推進協議会」の設立につながった。

監修プロジェクト一覧（214事業）

■構想、計画
長崎都心まちづくり構想
長崎市歴史文化基本構想
長崎市歴史的風致維持向上計画
長崎ブランド戦略
街路樹植栽・改善計画（案）

■まちなか全体
まちなか夜間景観整備
長崎MIRAISM
長崎開港450周年記念事業
下水道60周年記念事業デザインマンホール設置
ねんりんピックフラッグ等
防犯灯のLED化

■平和公園周辺
平和公園爆心地エントランスゾーン改修
平和の泉周辺改修
平和祈念式典生花パネルデザイン（被曝75周年）
祈念像ゾーンのトイレ
下の川沿い遊歩道
祈念像ゾーン～下の川への遊歩道
下の川水道管塗装
祈念像ゾーン遺構周辺の侵入防止柵
祈念像ゾーンパーゴラ
祈念像横のシェルター設置
爆心地ゾーン舗装改修
爆心地ゾーンベンチ設置
天主堂の見える広場
寄贈モニュメント設置位置検討
祈念像横のサイン設置
資料館ゾーンのトイレ改修
資料館ゾーン階段手すり
野口彌太郎記念美術館サイン
松山陸上競技場の公衆トイレの目隠し
天主公園改修
天主公園横水道管塗装
子育て支援センター
浦上天主堂通り
平野町橋口町2号線
松山町大橋町線（松山橋交差点）
山里小学校外壁改修
原爆救援列車案内サイン
平和町エリア道路修景計画
平和公園再整備基本計画

■浦上駅周辺
ブリックホール外壁改修
ブリックホール駐車場改修
浦上駅二輪車等駐車場

■稲佐山周辺
稲佐山電波塔ライトアップ
稲佐山スロープカー駅舎（山頂）
稲佐山スロープカー駅舎（中腹）
稲佐山スロープカー車両
稲佐山スロープカー軌道
稲佐山スロープカー中腹駅舎横トイレ
稲佐山スロープカー高架下照明
稲佐山遊歩道
稲佐山ロープウェイ待合所（淵神社）
稲佐山ロープウェイ待合所（山頂）バリアフリー改修
稲佐山淵神社横駐車場の街灯
稲佐山展望台屋上階の手すり、足元灯
稲佐山観光モニュメント
稲佐山公園噴水周辺改修
稲佐山登山道街灯設置
稲佐山登山道入口サインモニュメント

■長崎駅周辺
長崎駅舎（新幹線）
長崎駅舎（在来線）
いなさ口（西口）駅前広場
いなさ口（西口）キャノピー
いなさ口（西口）交通シェルター
いなさ口（西口）案内サイン
歩行者専用道路
西通り線
二輪車駐車場
観光案内所
中央通り線
東西線
東通り線
かもめ口（東口）
かもめ口（東口）キャノピー
かもめ口（東口）交通シェルター
かもめ口（東口）ロングルーフ
かもめ口（東口）昇降場
かもめ口（東口）南北デッキ
多目的広場
シンボルゾーン
出島メッセ長崎（デザイン調整）
かもめ市場（デザイン調整）
新かもめ広場（デザイン調整）
新駅ビル（デザイン調整）
長崎警察署（デザイン調整）
NBC社屋（デザイン調整）
JR九州長崎支社（デザイン調整）
コインロッカー案内サイン（デザイン調整）
いなさ口（西口）利活用社会実験
長崎駅周辺まちづくり推進協議会
高架下広場「若者広場（仮称）」
新幹線トンネル出口上の法面
宝町バス停背後地

■西坂公園周辺
西坂公園改修
西坂公園トイレ
西坂公園案内サイン
西坂公園文化財サイン
西坂公園横一方通行表示サイン
西坂公園アプローチ道の横断防止柵

■新大工町周辺
シーボルト通り
新大工町ファンスクエア
新大工町ファンスクエア駐車場
新大工町ファンスクエア歩道橋
伊良林小学校

■寺町・中島川周辺
ししとき川通り
眼鏡橋橋詰広場交差点
眼鏡橋橋詰の石橋群と寺町地区案内サイン
中島川沿い道路修景
寺町地区街路4路線
伊勢の宮線
魚の町トイレ
中央保育所石塀等改修

旧市役所・図書館・新庁舎・市民会館周辺
新庁舎
魚の町公園
出来大工桶屋町線
市民会館外壁改修
旧市役所別館跡地
中央公園（くんち広場、遊具、ベンチ等の設置）
中町公園（遊具、サインの設置、植栽管理）
桜町公園斎藤茂吉歌碑周辺整備
市立図書館周辺整備（ベンチ設置等）
岩原川プロムナード
岩原川エリアの未来を考える市民WS
岩原川水道管塗装
市民活動センター（旧市長公舎）ブロック塀改修

新地中華街・唐人屋敷周辺
湊公園改修
湊公園トイレ
湊公園内案内サイン
唐人屋敷地区のメインストリート
土神堂レンガ塀
土神堂前広場
三堂広場
仁田佐古小学校
仁田佐古小学校周辺道路
西小島館内町1号線

銅座地区
銅座地区街路4路線
銅座川プロムナード（銅座町松が枝町線）

丸山公園周辺
丸山地区本石灰町丸山町線
丸山公園ボラード設置
丸山公園周辺街灯

出島周辺
出島表門橋
出島表門橋公園
旧出島橋の再構築について
出島の旗竿
出島周辺再開発ビル前歩道
江戸町2号線
国指定史跡「出島和蘭商館跡」保存活用計画

東山手・大浦・南山手・浪の平地区
長崎居留地歴史まちづくり事業グランドビジョン
長崎居留地歴史まちづくり事業アクションプラン
洋館等活用に関するサウンディング型市場調査
長崎居留地景観ガイドライン
東山手町公園
松が枝町駐車場
松が枝町駐車場トイレ
埋蔵文化財整理所外壁・屋根改修
旧グラバー住宅見学用デッキ
グラバー園内の案内サイン
グラバー園内の転落防止柵
旧英国領事館保存整備期間中の街灯設置
南大浦地区道路（石橋電停～グラバースカイロード）
南山手地区環境整備事業（グラバー園南側道路）
市道南山手町上田町1号線・2号線
（グラバー園第二ゲート～鍋冠山展望台）
南公民館擁壁（ブロック塀）改修
南山手地区掲示板
旧浪の平小学校ブロック塀改修
鍋冠山公園展望台
鍋冠山公園駐車場
鍋冠山公園アクセス遊歩道
鍋冠山公園内案内サイン

深堀地区
深堀ふれあい広場
深堀公園（遊具、ベンチの設置）
深堀小学校屋内運動場外壁改修

伊王島
ターミナル駐車場改修
伊王島町の道路橋高欄
馬込教会下法面補強工事

野母崎地区
野母崎エリアの未来を考える市民WS
長崎のもざき恐竜博物館
長崎のもざき恐竜博物館ロゴマークデザイン
恐竜パーク

外海・黒崎地区
遠藤周作文学館思索空間アンシャンテ
遠藤周作文学館台風10号による災害復旧
道の駅夕陽が丘そとめサイン
道の駅夕陽が丘そとめ外構改修
道の駅夕陽が丘そとめ倉庫移設
「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」サイン設置
歩行者誘導サイン
出津教会への歩行者道
大野教会堂駐車場
大野教会堂駐車場サイン
出津橋歩道照明
外海中学校
外海地区護岸嵩上げ工事
黒崎公民館改修
国道202号（黒崎教会前）交通安全施設等整備

高島
軍艦島の見える丘公園
北渓井杭周辺整備
旧グラバー邸周辺整備

その他
全天候型こども遊戯施設「あぐりドーム」
路面電車「みなと号」
西浦上小学校校舎改築
小島小学校校舎等改築
デルノア通り案内サイン
日見大曲市営住宅・日見大曲アパート・宿町住宅建替え
大井手川
大井手川に架かる歩道橋
ペンギン水族館前の東屋
新西工場（ながさきデザイン会議）
軍艦島PR映像（4K映像）制作

監修プロジェクトの受賞歴

都市景観大賞

- 都市景観大賞2021都市空間部門大賞（国土交通大臣賞）：出島地区
- 都市景観大賞2018景観まちづくり・教育部門優秀賞（会長賞）：深堀地区の景観まちづくり

長崎市都市景観賞

- 長崎市都市景観賞2021（大きな建物部門）：出島メッセ・ヒルトン長崎
- 長崎市都市景観賞2019（公共施設部門）：出島表門橋・表門橋公園
- 長崎市都市景観賞奨励賞2019（公共施設部門）：鍋冠山公園展望台
- 長崎市都市景観賞奨励賞2017（夜間景観部門）：稲佐山山頂電波塔ライトアップ
- 長崎市都市景観賞奨励賞2017（公共交通のデザイン賞）：みなと号
- 長崎市都市景観賞奨励賞2015（官民協同によるまちづくり賞）：ししとき川通り

デザインに関する受賞

- 土木学会デザイン賞2021優秀賞：まちなか夜間景観整備
- 照明学会照明デザイン賞2020入賞：環長崎港夜間景観整備・平和公園地区
- グッドデザイン賞2018：出島表門橋
- 日本建築美術工芸協会AACA賞2018：出島表門橋

技術に関する受賞

- 土木学会田中賞2018：出島表門橋
- 国際交通安全学会2021年度学会賞（業績部門）：稲佐山スロープカー

主な掲載メディア

主な掲載雑誌

- 「新・長崎駅の全貌～大規模開発の核、西九州新幹線とともに始動～」，日経アーキテクチャアNO.1228，2022.11
- 「自治体の景観まちづくりの技術支援に関するセミナー～景観まちづくりを支える新しい仕組み～」，北海道開発協会機関誌「開発こうほう」，2018.2
- 「インハウスエンジニアの“家庭教師”街の景観向上へ役所内部から変革」，日経コンストラクション第680号「俺たちが土木を変える!　編集部厳選、時代を切り開く10人のテクノロジスト」，2018.1
- 「出島表門橋」，新建築第93巻1号，2018.1
- 「自治体の地域戦略を支える「景観まちづくり」へ」，pp.20-29，都市とガバナンスvol.28，公益財団法人日本都市センター，2017.9
- 「5つの世界遺産を見渡せる新名所 鍋冠山公園展望台（長崎市）」，日経コンストラクション第666号「土木のチカラ」，2017.6
- 「景観の役割は「全体の統合」と「価値向上」－景観専門監をおいた長崎市の取組み－」，pp.26-31，土木學会誌第101巻第6号，2016.6

主な寄稿雑誌

- 「交流の産業化」を支える景観まちづくり～長崎市景観専門監の取り組み～，第84回全国都市問題会議「個性を活かして「選ばれる」まちづくり～何度も訪れたい場所になるために～」，pp.21-23，2022.10
- 長崎市の地域戦略を支える公共デザインにむけて，「再開発コーディネーター」2021，No.211，pp.12-16，2021.5
- 公共施設を整備・更新しながら地域の価値を高める～長崎市景観専門監によるデザインマネジメント～，「市街地再開発」2020年10月号，No.606，pp.28-36，2020.10
- 長崎市における「積小為大」の景観まちづくりー「長崎市景観専門監」の役割と成果ー，「新都市」2020年３月号，第74巻第３号，pp.81-85，2020.3
- インハウス・スーパーバイザーとは～自治体職員に伴走する専門家～，公職研「月刊地方自治 職員研修」，第51巻10号，pp.15-17，2018.10
- 新幹線開業効果を高める駅周辺整備事業～長崎駅周辺整備事業での取り組み～，公益財団法人街づくり区画整理協会「区画整理」，61巻５号，pp.6-15，2018.5
- 自治体の地域戦略を支える「景観まちづくり」へ，日本都市センター機関誌「都市とガバナンス」，第28号，pp.20-29，2017.9

主なメディア出演

2017年９月から長崎ケーブルメディア「なんでんカフェ」の「市っトクながさき　シリーズ景観まちづくり」で、現在までに36回にわたり各プロジェクトの工夫や苦労した点を担当職員と一緒に紹介しました。放送内容はYouTubeで視聴可能です。

全国でまちづくりに取り組まれる皆様へ

自治体職員はまちづくりの要であり、その企画力、調整力、技術力、合意形成力が、各事業のアウトプットの質を決定します。今後ますます自治体政策に戦略性や民間との連携が求められる中、職員を実践の中で育成する必要性が高まっています。

景観専門監は、自治体職員のパフォーマンスを向上させることで、時代のニーズにあった公共政策・公共事業を推進し、自治体の地域戦略を実現するための仕組みです。縦割りを超えた横断的な取り組みを促進し、ビジョンと現場をつなぐ役割を担っています。

より効果的な自治体行政に向けて、景観専門監のような「インハウス・スーパーバイザー」（組織内監修者）の導入をオススメします。10年間の経験から、自治体にとって極めて有効な仕組みだと実感しています。

今後もますます長崎のまちは良くなっていきます。そんな長崎市の姿が、全国の自治体でまちづくりに取り組まれている皆様にとっての「もっと良くなれる！」という希望を持つきっかけになれば幸いです。このレポートを読んでいただき、さらに長崎市景観専門監の詳細についてお聞きになりたいことがあれば、遠慮なく下記メールアドレスまでご連絡いただけたらと思います。

長崎市景観専門監　髙尾忠志

takaotadashi@icloud.com

編著
長崎市景観専門監　髙尾　忠志

印刷・製本
株式会社 クイックプリント

＊本書を許可なく複写・複製することを禁じます。
＊落丁、乱丁がございましたら、発行元にご連絡くださるよう、お願いします。

長崎市景観専門監レポート 2013－2022
令和５年３月

発行
長崎市まちづくり部景観推進室
〒850-8685　長崎市魚の町４番１号
TEL：095-822-8888

長崎市
景観専門監
レポート

2013－2022

地域の価値を高める
公共事業を目指して